

塗膜防水

塗膜防水の代表例として、ウレタン塗膜防水がある。新築工事においてもパラペット、庇、バルコニーなどに対する防水材料として広く採用されている材料である。ウレタン塗膜防水は液状の材料を現場で塗布して硬化させる性質のため、納まり性や仕上がり性に優れている。その反面、現場施工時に材料の混合攪拌や塗布作業を行う必要があるため、十分な品質管理が欠かせない。

写真1はウレタン塗膜防水の硬化不良状態で、指を押しつけると軟化状態であることがわか

マンション
大規模修繕

NPOリニューアル技術開発協会

新築工事への
フリードバックII

4

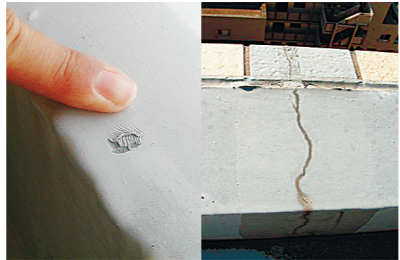


写真1

写真2

る。写真2はパラペット下地のひび割れにウレタン塗膜防水が追従できていない状態である。ウレタン塗膜防水の品質管理において重要なことは、以下の2点であると考えられる。

1点目は、正しい混合攪拌作業を行うことだ。主剤・硬化剤を規定の割合で正しく混合攪拌

正しい攪拌・塗布が基本

現場での品質管理に依存

して塗布することが基本となる。これを行わなかった場合、各材料の期待物性値が満たされなくなり、防水材料としての機能を十分に果たせなくなる可能性がある。

2点目は下地処理を適正に行い、規定の塗膜厚みを確保することだ。正しく混合攪拌された材料を使用しても、施工する下地に塗膜防水で追従できないひ

び割れが発生すれば、防水層は破断してしまうほか、規定の塗膜厚みを確保できなければ経年劣化や下地挙動によって、防水層の消失や破断といった不具合につながる可能性がある。

ウレタン塗膜防水材料は、半製品の状態で現場に搬入されるがゆえに、作業者の品質管理に依存する部分が多いのが現状であり、その認識を持って正しく

取り扱うことが重要となる。混合攪拌作業においては、作業者の負担を小さくするため、主剤・硬化剤の混合状態目安を色で判別できる材料や、混合攪拌が不要な1成分形のウレタン塗膜防水材料等の製品活用も、品質向上の一助となる。塗膜の厚みを確保するためには、補強布を併用してウレタン塗膜防水材料を塗布することも効果的だ。

また、新築工事では共用部の側溝や幅木などに対して、写真3のように着色（保護塗装）のみで仕上げられているケースも多い。この場合は、防水仕様ではなく保護塗装だけであるため、当然ながら下地のひび割れに追



写真3

従することは難しく、防水性能はない状態といえる。

漏水のリスクは、必ずしも高い部位ではないが、躯体保護という意味からウレタン塗膜防水を施工することが望ましいと思われる。長期に渡って建物を健全に維持するには、正しい品質管理に基づいて施工された塗膜防水が、漏水防止や躯体保護の役割を果たすことを強く願う。